

国際協力60周年記念シンポジウムを開催 01

2014年は、日本が国際協力を開始して60年の節目の年。11月17日、それを記念したシンポジウム「成長と貧困削減ー日本のODAに期待される役割」が東京で開催されました。

第一部では、岸田文雄外務大臣と国連開発計画（UNDP）のヘレン・クラーク総裁が基調講演。外務省が2014年3月にODA大綱の見直しを発表したことを受けて、岸田外務大臣は「日本も、日本を取り巻く環境も大きく変化しているので、ODAも進化を遂げなければ」と強調しました。

第二部は、NHKの道傳愛子解説委員をモデレーターに、「日本の国際協力と期待される役割」をテーマにしたパネルディスカッションが行われました。パネリストとして参加したのはフイリピン人のデル・ロサリオ外務大臣、ケニア人のマイケル・カマウ運輸・インフラ省長官、ブルッキングス研究所のジョン・ペイジシニアフェロー、田中明彦JICA理事長。田中理事長は日



パネルディスカッションでは、途上国の未来について活発な議論が展開された



「相手国の立場に立つのが日本の国際協力の特徴」と語る田中理事長

本の国際協力の歴史を振り返り、「インフラ整備や農業支援の分野から、保健・衛生、教育、平和構築などの割合が大きくなってきている。一村一品運動やカイゼンといった日本ならではの協力を、相手国の立場に立つて行うのが重要」と語りました。

パネリストの一人、ケニアのカマウ長官は、「日本のODAはアフリカに成長できるというモチベーションを与えてくれた」と言及。ブルッキングス研究所のペイジ・シニアフェローも、アジアでの日本の経験をどう開発に生かすか分析し、「必要なのは、その国の人々自身が戦略、スキル、知識を持つこと。これはまさに日本の国際協力が得意とするもの。日本がアフリカ援助のリーダーになることを期待している」と語りました。

最後にパネリストが、会場からの質問に答えながら意見交換。60年を振り返り、今後の日本の国際協力の在り方を考える貴重な機会となりました。

ケニア長官と元協力隊員が40数年ぶりに再会 02

「国際協力で大切なのは、人と人の心に橋を懸けること」と話すのは、ケニア運輸・インフラ省のマイケル・カマウ長官。国際協力60周年記念シンポジウムにアフリカ代表として出席するために来日した際、40数年前にケニアで活動した青年海外協力隊員、千々岩宗貞さんと今野充さんと再会を果たしました。

2人は自動車整備の隊員として、ケニア中央部の町ニエリの林野庁営林署に配属。そこにカマウ長官の父親が勤めており、当時小学生だったカマウ長官は協力隊員との交流を覚えていたのです。

当時の写真を見ながら昔話に花を咲かせ、カマウ長官は「再会できたのは奇跡」と喜びを語りました。千々岩さんと今野さんも「あの時の子どもが立派になってきていることに驚いた。覚えてくれていてうれしい」と話し、時を超えた感動の再会になりました。



「これは私の母親ですね!」。カマウ長官(中央)は当時の写真を見て笑顔に

田中理事長がワシントンDCを訪問 03

12月3日、田中明彦JICA理事長は米国ワシントンDCでシンポジウムに出席しました。これはジョージタウン大学などが共催する「女性・平和・安全保障に関する国別行動計画」に関するアカデミーの設立に合わせて開催されたものです。

国連安全保障理事会では、紛争下の女性をめぐる課題に焦点を当て、各国は行動計画の策定を進めています。シンポジウムの冒頭では、ヒラリー・クリントン元米国国務長官が基調講演を行い、女性が平和構築プロセスに参画する重要性について論じました。

パネルディスカッションでは、田中理事長がパネリストの一人として登壇。安倍晋三内閣総理大臣のイニシアチブで行動計画の策定を進めていることや、この分野に関連するJICAのフイリピン・ミンダナオの平和構築支援などについて紹介しました。



パネルディスカッションに参加した田中理事長(右端)